
ワンだ！FUL DAY 'S

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンだ！FULL DAY'S

【Nコード】

N4636E

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

おいらと、お姉ちゃんは毎日、楽しく暮らしていたんだ。でも、大嫌いなアイツが現れてからというもの……

（前書き）

弥生 祐さん主催の五分企画参加作品です。
五分企画で検索すると、他の作者のお話が楽しめます。

その日のおいらは、朝から大好きなお姉ちゃんに近所の公園まで散歩に連れていってもらってご機嫌だった。公園でお姉ちゃんは、久々にボール遊びをしてくれて、おいらはとても幸せな気分を満喫した。

でも、散歩から戻ってお家に帰ってくると、とたんにおいらの幸せな気分は吹き飛んだのだ。

さきほどまでの、おいらの幸せな気分をぶちこわした原因は、おいらの大嫌いなアイツが、お家の前でお姉ちゃんを待っていたからだ。

アイツは、おいら達を見つけると、胡散臭い笑顔を浮かべて、お姉ちゃんに近寄ってきた。

お姉ちゃんも、頬を緩ませて、ふだんおいらに見せた事のない表情をして楽しそうだ。

あいつは、しばらくの間、おいらのことを無視してお姉ちゃんと会話していたが、おいらは早くお家に入りたかったので、お姉ちゃんに催促するように吠えた。すると、あいつは、あるうことがおいらにちよっかいをかけてきやがった。

「ほら、チビ犬」と言って、アイツは中腰になって、おいらの目の前に片手を突き出したのだ。

全く持つて無礼千万な奴だ。おいらには、ミユウと言う立派な名前があるにもかかわらず、チビ犬だと言いやがった。しかも、おいらにお手をしろと催促してやがる。そもそもアイツは半年前ほど前にはじめて姿を現した時から、初対面にかかわらず、おいらにお手をしろと強要する嫌な奴だ。

おいらは、思いつき吠えてやった。

アイツは、スツと差し出していた手をひっこめると、おいらに向かって文句を吐いた。

「……まったく可愛くないチビ犬だなあ」

全く持つてして腹の立つ奴だ。

おいらは、更に吠えまくってやった。

「こらあ、ミュウ！ 静かにしなさい」

おいらの尋常ならぬ様子を見て、お姉ちゃんは、おいらの頭を軽く叩いた。

ちくしょう、ちくしょう！

アイツのせいで、お姉ちゃんに怒られてしまったじゃないか。

アイツは、叩かれたおいらを見て、ざまあみろーっていう表情をしていた。

しかし、なんで、お姉ちゃんはアイツの味方をするのだろう？

どうにもこうにも、おいらは納得がいかないのだ。

アイツは、どう見ても悪い奴に決まっているのに……

いつか、本性を見せて、お姉ちゃんを泣かせるに決まっているのだ。

そのうち、アイツの化けの皮を剥がして、お姉ちゃんをアイツの魔の手から救わないといけないとおいらは思った。そんなことを考えていたら、首元が激しく引つ張られた。

「さあ、ミュウ、家の中に入りなさい」

お姉ちゃんは、おいらをお家の中にひっぱりこ込むと、首ひもを外して、お姉ちゃんの部屋に閉じ込めた。

「ミュウ、お姉ちゃん、ちょっと出かけてくるから、ここでおとなしくしときなさい」

そう言って、お姉ちゃんは、無情にも部屋の扉をしめて、おいらに留守番を命じたのだった。

くそ、いつも、アイツが現れると、おいらは留守番させられる。

しかも、最近アイツが現れる頻度も多くなってるような気がする。早く、なんとかしないと、お姉ちゃんは、アイツに毒されてしまう気がする、気がでないのだ。

しかし、一体どうしたらいいものかと、考えていたら眠たくなつてしまった。

流石に、ボール遊びをしてもらったから、体が疲れてしまったようだった。

そうして、おいらは、しばしの眠りにつくことにした。

どれくらい、おいらは寝たのだろうか？ おいらは、ただならぬ気配と物音を感じて目が覚めた。

部屋の中は、すっかり薄暗くなつてしまつていて、昼とも夜ともわからない。

おいらのうたた寝をさえぎった気配と物音を探すために、薄暗い部屋に目をこらした。

目をこらした先には、おぞましい光景があつた。

なんと…… その光景とは、大好きなお姉ちゃんが、ベッドの上で裸にされて、アイツに襲われていたのだ！ ついに大嫌いなアイツが本性を現したのだった。しかも、お姉ちゃんは、アイツに上から覆いかぶされていて、苦しそうな声を上げているではないか！

こ、これは、お姉ちゃんの一大危機ではないのか！！

しかも、アイツは、よく見ると、何度も何度も腰を動かしては、お姉ちゃんを攻撃している。そのたびに、お姉ちゃんは、死にそうな声をあげている。

このままでは…… お姉ちゃんが殺られる。

く、くそ、アイツめ…… 大好きなお姉ちゃんをいじめやがつて

……

番犬としての意地を見せる時がきたのだ。

おいらは、邪悪なアイツに決死の覚悟で突進した。

そうして、アイツの汚い尻をロックオンすると、思いつきり牙をたてて噛み付いてやつた。

「うぎゃああ」

アイツは、物凄い声をあげて、お姉ちゃんの体から離れた。

「キヤアー」

お姉ちゃんも、今まで聞いたことのない声をあげていた。

アイツは、おいらの攻撃によって、ベットから転げおちて、のたうちまわっている。

ついに、悪いアイツを退治してやった瞬間だった。

おいらは、褒めてもらう為にお姉ちゃんの横にいき、尻尾を振った。

お姉ちゃんは、おいらを見ると、怖い顔になった。

「ミュウ何てことするのよ！」

おいらには、お姉ちゃんが、何で怒ってるのか、全くわからなかった。

でも、すぐに、お姉ちゃんは優しい顔になっておいらに言った。

「ミュウは、お姉ちゃんが襲われてると思って助けてくれたのね！」

ありがとう」

お姉ちゃんは、おいらの頭をなでて、抱きあげると鼻の頭にチュウをしてくれた。

あの日以来、アイツは、おいらの前に姿を現さなくなった。

お姉ちゃんも、以前のように、おいらをひとりぼっちにせずによく遊んでくれるようになった。

また、お姉ちゃんを独り占めできるワンダフルな日々を取り戻せたのだ。

しかし、ワンダフルな日々は長くは続かないようだ。

近所の公園からお姉ちゃんと帰ってくると、お家の前で、見たこともない新たなアイツが手を振ってお姉ちゃんの帰りを待っていたのだ。

でも、おいらは嬉しかった。

きつと、こいつもまた、化けの皮が剥がれて、おいらに噛まれるに違いないと思ったからだ。

了。

（後書き）

実体験を元にアレンジして書きました。

いやいや、今回の五分は、動物が苦手な作者としては、大変苦しみました（汗）

感想など、いただければ励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4636e/>

ワンだ！FUL DAY'S

2010年10月8日15時02分発行